

ホームスパン工芸への及川全三の取り組み

Oikawa Zenzo's Work on Homespun Handicraft

岩手県立大学盛岡短期大学部 菊池直子, 佐藤恭子

はじめに

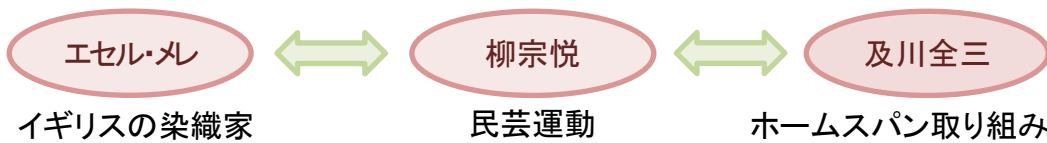
及川全三(1892~1985年)は、農家の副業で作られていたホームスパンに美的な価値を与え、工芸品に高めた人物である。民藝運動を起こした柳宗悦に感化を受け、植物性染料による和紙と羊毛の染色、ホームスパンの製作と指導に尽力した人物として知られている。ホームスパン界に多大な功績を残したが、及川のホームスパンに注目した調査報告はみられない。本研究では、収集資料や聞き取り証言をもとに、美しさを表現するために取り組んだ技術的な要素の中から、植物性染料による染色、ホームスパンの手本、テキスタイルデザインと図案化の3点に注目し検証した。

ホームスパン取り組みの契機

及川は、元来の教育者である。1927(昭和2)年3月に慶應義塾幼稚舎を辞職してからホームスパンに取り組むようになった経緯は、1973(昭和48)年12月に開催された『及川全三を囲む会』で往事を語る内容から知ることができる。及川は、民藝運動を起こした柳宗悦に会い、イギリスの染織家エセル・メレのホームスパンを見せられ、染織工芸の道をすすめられた。



ホームスパンを着用した及川全三(70歳代と推定される)



植物性染料による染色

及川は、柳宗悦からの「植物染でないとはホームスパンではない」という教えを守り、植物性染料による羊毛の染色を独学で研究し、自然の美しい色をホームスパンに表現した。

1939(昭和11年)発行の『羊毛本染実験覚書』には、岩手県産の染草やホームスパンに適する染草等が説明されている。また、三種の染法を解説し、イタドリの根の発色例が示されている。



『羊毛本染実験覚書』(盛岡大学図書館 所蔵)



植物染料の何よりの特色はその色相である。色の美しさである。なぜその色が美しいか。自然な色だから人間の性にか。自然の色だから自然な性にか。うのだと解いては間違いない。自然の中では虹の色もけげなく映らない。自然物の色は微妙な影を伴い、何かしら含みを持つ。植物染色の色は、色素が自然界にある時とは同じ状態ではないのであるが、やはりそれと似通っていない。穏かで濼い。どこからそれが来るか、色が複雑で単純でないからである。合成染料といつても植物染料の色素と根本的に異つたものではない。同じ物が両方に見出された例もある。違ひは植物界から見出されたと否とであるが、植物染料ではそれが純粋な一色なのに、植物染料ではそれが決して単味ではないのである。知られているだけでも、二種や三種もの有効色素を含んだものが少なくない。

『植物染について』(日本民藝 第4号に寄稿)より抜粋

- ① 染浴 → 媒染浴
- ② 媒染浴 → 染浴
- ③ 媒染剤を入れた染浴

三種の染法

ホームスパンの手本



及川は、柳宗悦からエセル・メレのホームスパンの端布をもらい、和紙で装幀されたスクラップブック『裂見本』に丁寧に貼り付け、手本にしていた。(東和ふるさと歴史資料館 所蔵)

テキスタイルデザインと図案化



サンプルのスクラップの例

4枚綜紵と8枚綜紵の織文様の例

(東和ふるさと歴史資料館 所蔵)

“手工芸”の文字の図案化

“杼、糸巻き、総”の絵の図案化

まとめ

及川は、柳宗悦からの「植物染でないとはホームスパンではない」という教えを守り、植物性染料による羊毛の染色方法を研究、実践した。1936(昭和11)年に発行した『羊毛本染実験覚書』はその成果の一つで、岩手県産の植物性染料を紹介し、ホームスパンに適する植物の条件等が説明されていた。及川が手本としたものは、イギリスの染織家エセル・メレのホームスパンであった。和紙で装幀された『裂見本』には、柳宗悦がエセル・メレのホームスパンで洋服を仕立てたときの端布が貼付されていた。また、ホームスパンのサンプルをスクラップした複数の冊子の中に、“手工芸”の古い字体を図案化したものや、“杼、糸巻き、総”の絵を図案化したものが貼付されていた。及川は、菱形をモチーフとするテキスタイルを多数デザインしていたが、それらは“杼、糸巻き、総”からの発想ではないかと考えられた。